

Title	ガッコウ キョウイク ハ ナンノ タメ ニ ア ルノカ
Author(s)	寺田, 俊郎
Citation	臨床哲学のメチエ. 2 p22-p.25
Issue Date	1999
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11900
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集：教育の臨床哲学

学校教育は 何のために あるのか

寺田俊郎

「不登校」を通じて学校教育を考える試みが続けてきた。臨床哲学研究会や研究室での討論を通じて刺激を受け、文献を読み、いろいろ考えてきたが、まだ私自身の言葉で学校教育を語れないでいる。出発点として私自身の教員経験があり、それに則して考え発言してきたつもりであるし、これからもそうしていきたい。しかし、自分なりの視点というものがまだ定まらない。残念ながら、今は甚だ断片的なものしか書くことができない。

「不登校」の子どもと親の苦しみは、学校というものがどんなに強く我々の意識を規定しているかをあらためて教える。栗田隆子は、学校に「行きたくない」自分が象徴する価値観はとても恐ろしいもので、「行きたくない」という気持ちを無視すると、「身体がそれを忠

実に私に知らせてくれるのが役割であるかのように」体が動かなくなる経験を報告している（98年度第1回臨床哲学研究会での報告、『メチエ』創刊号所収）。また、畑英理は、学校にいけなくなった子どもは、「自分の存在の承認を必要とするような、根源を揺るがすもののように見える」不安を感じ、その親は「世間」と「子ども」の双方から問われることによって、「自分が無意識に持っていた学校を中心とする価値観をあぶり出して見せられる」ことになる、と述べている（同上）。私も、高等学校の教員として働いている間、生徒は学校に来るものだということを疑ったことはなかった。学校の存在は我々にとって自明のものとなっており、学校を中心とする価値観は広く強く共有されている。山田潤の言うように、学校は子どもが学ぶための「便宜」の一つでし

かない(98年度第2回臨床哲学研究会での講演)にもかかわらず、である。

生徒に「なぜ学校に来なければならないのか」と問われても、生徒にとって納得がいく答えを示すことはとてもできそうもない。現代を生きる我々には学んでおくべきことが色々あるだろう、と言うのがせいぜいである。それはまったくの的外れであるわけではないが、学校で行われていることの多くはそれと重なり合わない。単なる知識なら学校でなくても身につけられる。特に進学に必要な受験学力は学校よりも塾や予備校の方が能率よく身につけられる。学校に求められる最優先事項は受験学力であり、受験学力の習得に役に立たなくなった学校は卒業資格を与えてくれる機関でしかない。要出席日数ぎりぎりまで欠席して受験勉強に励む生徒を責めることはできない。最近では公立高校などでも受験学力の習得に力を入れるという形で自ら予備校化しているが、それは何も今に始まったことではなく、学校制度が始まって以来日本の学校はずっとそれを基本としてきた。荻谷剛彦によれば、日本の学校制度は、公平を建前とする受験制度によって出身階層や身分から比較的自由に新たな社会的地位つくことのできる学歴社会を現出し、そのなかで特定の階層や身分からの中立性の高い「学校文化」が成立したが、その中心にあるのが専門知識でも教養でもない受験学力

である(『大衆教育社会のゆくえ』、中公新書)。

受験学力の習得に躍起になって知的活動の基本のトレーニングがなされない「知の空洞化」も気になることではあるのだが、ここでは立ち入らない。考えてみたいのは、現場の教員が受験学力の習得だけではいけないと考えるときに前提となっている、学校は人間形成の場であるという理念である。学校は豊かな人間性を育むことが第一の使命であって学力の習得に偏ってはならないという考えは根強いが、この考えを批判する者も少なくない。長田勇は、学校で「人格」を形成するという理想を批判して、望ましい「人格」像が教員によって異なる限り、公的な場では「人格」形成に関わる指導をすることは不適切であるとし、学校は生徒の「人格」を問わない教科指導の範囲に仕事を限定すべきであると論じている(『「人間教育」物語りのパラドックス』、川島書店)。この論には、人間形成と称する教員の価値観の押しつけが学校で行なわれてきたこと、世間が学校に対して過大な要求をしてきたことに対する批判としては賛成できるが、だからといって教科指導に限定すべきであるということには必ずしもならないと思う。ある特定の価値観に無批判に基づく「徳育」ではなく、多様な価値観を前提とする規範を身につけるというレベルでの人間形成も考え得るからである。

山田潤は、社会の豊かさとは、個々人の「こんな風に生きたい」という思いを「すりあわせ、おりあわせる」こと、混沌とした同じ時空のなかで共に暮らすとき、「どこまで譲り合い、どこまで助け合い、どこまで責任を引き受けるか」にあると述べている（前掲講演）。私はこの豊かさのイメージに共感できるが、それが可能になるためには、各人が「こんな風に生きたい」という思いをもっていることを承認し、「譲り合い、助け合い、責任を引き受ける」という最低限の規範が前提となる。この意味での人間形成は公的な場に矛盾しないばかりか、むしろ公的な場で人と交流するなかでなされるべきことであろう。その場が学校である必然性はないが、学校はその場の一つではあり得ると思う。

あらためて言うまでもないことだ、戦後教育の理念としてすでに半世紀にわたって唱えられ続けてきたことだと言われるかもしれない。その通りである。個の尊重と自立した個の共同は、民主主義的教育の基本として教育基本法にも教育審議会答申にもうたわれていることである。しかし、それが学校教育において実体を伴うことはついになかった。

宮台真司は、「成熟社会」における教育の目的は個人が個人として他人を承認し承認される文化を根づかせ保つことにあると言う。「過渡的近代」から「成熟した近代」へ移行すると、人々が共有

する価値観、幸福観が不透明になり、「過渡的近代」において教育の使命だった知識や価値を伝達することが成り立たなくなる。また、家族・学校・地域共同体が空洞化し、社会的交流のなかで承認された経験のない子供たちが増える。人は他人との社会的交流のなかで肯定・承認されて自尊心や尊厳を獲得するのだから、共同体への所属を離れて人と人との承認を授受しあえるようなコミュニケーションの機会を教育のなかに人為的に保障する必要がある。これは、自己決定能力の育成のシステムをつくるということでもある。自己決定することが不可避で、かつ失敗しても受けとめることができるシステム、すなわち試行錯誤を保障して自己決定と自己責任を学ばせるシステムである。（『学校を救済せよ』、学陽書房；『＜性の自己決定＞原論』、紀伊国屋書店）この議論は自律的な市民の育成という啓蒙主義的教育理念に連なるものであり新しい味はないが、耳ざわりのいいスローガンに終わってきた自律の教育の意味するところを明確に展開したところに学ぶべき点がある。

現在の学校は、自己決定と自己責任の能力の育成からは程遠い。過剰な管理と干渉とによって、自律と責任はむしろ損なわれている。揺らいできた学校的価値を守ろうとする学校の本能、学校的価値を支えている世間のイメージ、教育を学校まかせにしている家庭

や地域の責任放棄など、いろいろな要因が考えられる。が、一つはっきりしているのは、自己決定と自己責任の能力を育成することが真剣に考えられることがあまりに少なかったということである。過剰な管理と干渉とは、学校を教員と生徒にとって息苦しい不幸な場所に行っているだけでなく、道徳性の成長にとって有害ですらある。たとえば、学校生活の隅々まで規定する校則は、許されることと許されないことを自分で考えることを妨げ、規範の存在理由を不明にする。他人に危害とならないことについては基本的に個人の自己決定が尊重されるという原理が徹底されるなら、どんなに風通しがよくなることだろう。

自律の教育については考えるべき点も多い。まず、近代の個人主義的人間観に対する批判がそのまま当てはまる。一言で言えば、人間を個々独立した理性的存在者として把握する抽象的な人間理解に対する批判である。人間のあり方を家族・地域・民族などの親密な関係において把握する共同体主義的な立場からの批判も、人間の相互的なあり方を捨象して「人」の資格を理性的に自己決定する能力のみに求める生命倫理学におけるパーソン論に対する批判も、同じ点をついている。また、教育学において「教育関係のパラドックス」として論じられてきた、啓蒙主義的な教育観のはらむ問題もある。それは、自律へと

指導するというパラドックス、あるいは自己決定を教えることはパターンリズムに他ならないというパラドックスである。これらについて、十分に論じる用意は今はない。差し当たり次のように答えることができるのみである。個人主義的人間観は確かにある意味で抽象的なものである。しかし、それは親密な人間関係のなかで成長し生活する人間の現実のあり方を無視するわけではない。特定の共同体の親密な人間関係のなかで生き共同体の価値を内面化している個人が、そうした人間関係や価値を共有しない人々との関係において最低限共有すべき、人間の在り方の一つの理念である。また、自己決定を学ぶことができるのは、他者との交流においてであり、試行錯誤を通じてであることも見落としてはならない。こうした点の詳しい検討は今後の課題としたい。

(てらだとしろう・博士後期課程)

